

施肥および株間がサツマイモ「兼六」の収量性に及ぼす影響

1 背景・目的

「兼六」は、砂丘地で青果用品種と同様に栽培すると、茎葉の繁茂が劣り、いもが小さく収量が低い。このため、砂丘地で干しいも向けの加工歩留まりの高い大きないもを生産するための栽培方法を検討する。

2 技術のポイント

- (1) 基肥に固形肥料を用いることで、8月上旬の茎葉の生育が促進され、収量は従来の有機化成肥料に比べて約3割増加する(表1)。
- (2) 株間を60cmの疎植とすることで、栽植本数は少なくなるものの、1本当たりの塊根重が増加し、1株当たりの塊根数も増加することから、収量は慣行の40cmに比べて約3割増加し、干しいも加工に適するS以上(塊根重150g以上)の収量が2倍以上に増加する(表2、図)。

表1 施肥の違いが生育及び収量に及ぼす影響

基肥の種類	8月上旬		収穫時	
	茎葉重 (g/株)	塊根数 (本/株)	塊根重 (g/本)	換算収量 (t/10a)
有機化成肥料	239	4.9	162	2.5
固形肥料	421	5.6	186	3.3
有意差	*	NS	NS	-

注1) 定植日：平成23年5月27日、収穫日：10月17日

注2) 施肥量(kg/10a)：N-P₂O₅-K₂O=10-20-24

注3) 固形肥料区のPKは苦土重焼燐と硫酸加里で調整した。

注4) *はt検定で5%水準の有意差があることを、NSは有意差がないことを示す。

表2 株間の違いが収量に及ぼす影響

株間	栽植本数		塊根数		塊根重 (g/本)	換算収量 (t/10a)
	(株/10a)	(本/株)	(千本/10a)	(千本/10a)		
40cm	3,125	5.2b	16.3	131b	2.0	
50cm	2,500	7.5a	18.8	132b	2.4	
60cm	2,083	8.2a	17.1	167a	2.7	

注1) 定植日：平成25年5月21日、収穫日：10月23日

注2) 施肥量(kg/10a)：N-P₂O₅-K₂O=10-10-10(固形肥料)

注3) 異符号間にTukeyの多重比較で5%水準の有意差があることを示す。

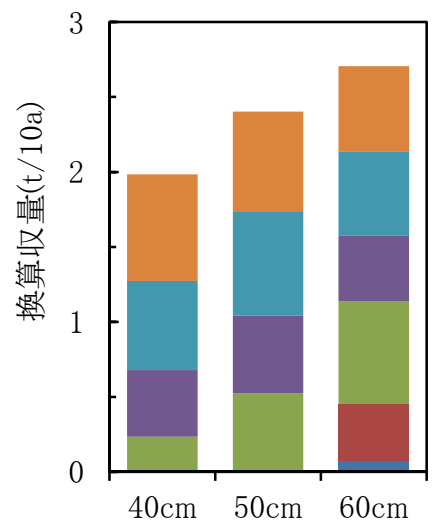


図 株間の違いが階級別収量に及ぼす影響

■ 3S (50-100g) ■ 2S (100-150g)
 ■ S (150-210g) ■ M (210-330g)
 ■ L (330-500g) ■ 2L (500-800g)

3 成果の活用と留意点

- (1) 本技術は砂丘地における「兼六」栽培に適用できる。
- (2) 「兼六」は夏季に草勢が低下しやすいため、かん水管理の検討を行う必要がある。

問合せ先：砂丘地農業研究センター TEL 076-283-0073
 担当者：増田大祐・西村康平